

『食糧・農業』

逸見謙三 著

国際領域上席主任研究官 會田 陽久



『食糧・農業』

著者／逸見謙三
 ページ数／138 ページ
 出版年月／2010 年 11 月
 発行所／筑摩書房

著者は、東畑精一の学風を受け継ぐ農業経済学の泰斗である。世界農産物貿易論の草分け的存在でもあり、米寿を迎えて本書を上梓された。近年に至って『13億人の食料－21世紀中国の重要課題－』、『いわゆる嗜好品－酒類、タバコ、茶、コーヒー』、『地球環境問題概説』といった著書を世に出し、本書以降も更なる出版の計画があるとのことである。長年にわたり、研究と思考を積み重ねてきた諸問題への論考は斯学の後進や農業、食料に関する問題に関心を持つ読者にとって示唆に富む貴重なものである。

本書は、農業経済学の中心を占める問題を幅広く、歴史的な感覚を踏まえて考察したものであり、目先の問題を皮相的に捉えがちという一般的な傾向に対し本質的なものの見方を示してくれている。順序を追って本書の内容を紹介する。

第1章では若干の予備的説明として飢餓人口がいかにして発生するかを示している。飢餓の多くが不作とは関係なく起こるという実態を説明している。また、食糧と燃料という共にエネルギーを供給するもの同士の関係が分析されている。

第2章は世界における食糧生産・農業の発展を扱っている。食糧需給変化のモデルとして人口に膾炙されているマルサスのモデルと並んでボゼラップのモデルが示され、農業の歴史について集約化の過程が説明され、食糧生産・農業発展の諸相が実例を背景に明示されている。また、農業発展に大きく貢献した農業研究の展開と農業生産の振興が世界の飢餓を救うが、さらに食糧援助として食糧不足の途上国を救うことと国際的枠組みの下で備蓄を持つことへと論を進め、備蓄と商品協定の説明がなされる。以上、世界食糧市場の不安定性の程度とその要因と対応策の検討が行われている。

第3章は中国、インド、およびサブサハラ・アフリカという表題で、その食糧生産・消費の動向が世界の食糧市場に決定的影響を及ぼすと見られる2カ国と1地域について考察している。重要な視点は、中国社会は農民の社会であり、中国は農村国家であると断じているということである。これは中国を分

析する上で避けて通れない点であり、これを踏まえない研究はこの本質を見誤ると指摘している。中国の長期人口変動と現在に至る中国の政治、経済の流れが検討され、現在抱える問題点が示されている。

インドについても、長い歴史を有する社会についてインダス川流域の都市国家を基盤とした銅、青銅文明やそれに続くアリアン文明から説き起こして現在に至る状況を分析、検討している。インドの農業、特に灌漑を伴った農業の状況が中国と著しく異なり、農業・農村と灌漑面積の増加傾向に関するインドの経験がいかに特異なものであるかが示されている。サブサハラ・アフリカは、現在に至っても深刻な食糧不足状況にあるが、そのような状況下でありながら、マレーシア、シンガポール、タイなどの大手食品会社がオイル・パーム農園のための農地取得、製粉工場の取得、養鶏飼料の生産拠点での増産に乗り出しており、食糧不足解消に役に立っていない現状を示している。また、アフリカがヨーロッパ諸国による植民地化の後遺症に悩んでいる現状が指摘されている。数多くの民族・言語集団をヨーロッパの都合で54の国家に押し込んだことが多くの歪を生み出していることが現在に至る問題点となっている。それに加えて繰り返し起こるインフレと資本逃避が問題であり、豊富な鉱物資源の採掘権が政府の管理下に無いことが問題とされている。将来の展望としては、農業軽視の風潮が変化し、日本の農業開発重視型のODAなどが明るい兆しとなっていることが指摘されている。

第4、5章では日本の食糧、農業についてまとめられており、4章で歴史と概念的枠組みが整理されており、米不足・米過剰の悪循環として今世紀に入ってから日本の経験が分析されている。5章では現状と政策として第二次大戦勃発前後から現在に至るまでを時期区分を通して分析している。